

使徒の働き14章19－28節 「主のために奥地に入って」

1A 苦しみを経る神の国 19－23

1B 石打ちからの生還 19－20

2B 励ましと教会の建て上げ 21－23

2A 神の恵みの帰還 24－27

1B 福音宣教 24－26

2B 兄弟たちへの報告 27－28

本文

使徒の働き 14 章を開いてください。14 章の後半部分を、今晚は見ていきます。前回、私たちは、ピシティアのアンティオキアから、さらに東の奥に入っていて、イコニオンに行き、さらにリカオニアの町であるリステラまで来たところを見ました。

ここでは、生まれつき足なえの男が、その与えられた信仰によって立ち上がりましたが、それで、ギリシア語ではなく、リカオニア語で、バルナバをゼウス、パウロをヘルメスとして、彼らにいけにえを献げようとしていました。それで、二人は彼らの前で衣を裂いて、群衆の中に飛び込んで、同じ人間であることを叫びました。神ではなく、自分たちに栄光が向かう、恐ろしい瞬間でした。それで、バルナバが中心に語り、こうした偶像礼拝から神に立ち返るために、福音を宣べ伝えているのだと説きます。

そして、これから、なんと同じ群衆から、パウロが石打にされてしまうのです。その前の町、イコニオンでも、石打にされそうになったので、彼らは難を避けるために出て行ったのです。この前、学んだように、ここはローマの支配が行き届いていないようなところ、力が物を言うようなところであることをお話しました。

宣教の地においては、いろいろなことが起こります。ある東南アジアの国ですが、宣教師が礼拝で説教中に、お母さんが赤ちゃんにお乳を飲ませているという話を聞きました。おっぱいを隠しているわけではないのです。日本では絶対にあり得ない話ですが、習慣が異なり、また、社会秩序が違うところは、世界中にいくらでもあります。私たちも、あらゆる状況において、それでも、しっかりと強く立ち、動じることなく、主のわざに励まないといけない、ということです。

1A 苦しみを経る神の国 19－23

1B 石打ちからの生還 19－20

¹⁹ ところが、アンティオキアとイコニオンからユダヤ人たちがやって来て、群衆を抱き込み、パウロ

を石打ちにした。彼らはパウロが死んだものと思って、町の外に引きずり出した。

アンティオキアにおいても、イコニオンにおいても、信じようとしないうダヤ人たちがいて、彼らが異邦人を扇動して、パウロとバルナバを迫害するように仕向けたことを思い出してください。妬みというのは恐ろしいもので、執拗にパウロに追ってきています。そして、イコニオンでやったように、パウロに対して石打ちをしました。パウロ自身、「石で打たれたことが一度(11:25)」と、コリント第二で回想しています。

そして、「群衆を抱き込み」とあります。先ほどまで彼らを神々に祭り上げていた人々が、今度は石打ちしています。けれども、偶像礼拝ってそういうものです。後に、パウロを含む囚人たちが、地中海で遭難して、マルタ島に漂流しました。パウロが、火をたくために枯れ枝を集めて火にくべているパウロに、まむしが出てきて彼の手にかみつきました。島の人々は、「この人はきっと人殺しだ。」と言いますが、彼が一向に死なず、まむしを火の中に振り落としたので、「この人は神様だ」と言っているのです。(28:6)ですから、神に用いられている器にしか過ぎないのに、人を持ち上げる人は、とかく、自分の期待が裏切られると、ことさらにその人を非難します。

²⁰しかし、弟子たちがパウロを囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。そして翌日、バルナバとともにデルベに向かった。

ステパノの殉教の時と同じように、弟子たちはパウロが死んでいるならば、埋葬しようと思っていたことでしょう。ところが、彼は立ち上がりました。そして、すごいのは、彼はそのまま、自分が石で打ち殺されたリステラの町に入っていくのです。

この間に、彼は、第二コリント 12 章で証言していることを経験したのではないかと見る人が多いです。「12:2-4 私はキリストにある一人の人を知っています。この人は十四年前に、第三の天にまで引き上げられました。肉体のままであったのか、私は知りません。肉体を離れてであったのか、それも知りません。神がご存じです。3 私はこのような人を知っています。肉体のままであったのか、肉体を離れてであったのか、私は知りません。神がご存じです。4 彼はパラダイスに引き上げられて、言い表すこともできない、人間が語ることを許されていないことばを聞きました。」

聖書には、天が複数あって、「エペ 4:10 すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方」とあります。第一の天は、物理的な天空であり、第二の天は、「空中」とも呼ばれ、権威の持つ者がいるところ、サタンもいるようなところであり、第三の天がパラダイス、神の御座が置かれているところと考えられます。言葉に言い表すことが許されていない、つまり、それほど栄光に輝いており、人の理解の中に押し込むならば罪を犯すかのような、ものすごさということです。

パウロの強みは、天の栄光を知っていることでした。「Ⅱコリ 4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。」とてつもない苦難でも、それが軽くなるような重い栄光が、自分たちに与えられていることを知っているのです。主の栄光の希望が、私たちの今の苦しみを耐える力を与えます。

さらに、その後に続く、彼の肉体のとげというのも、この時に受けた傷なのだという意見もあります。「12:7-10 その啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高慢にならないように、私を打つためのサタンの使いです。8 この使いについて、私から去らせてくださるようにと、私は三度、主に願いました。9 しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。10 ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」パウロが起き上がった時には、ぼろぼろになっている肉体であった可能性があります。ペルガでマラリアの熱病によって目が見えなくなった可能性を以前、お話ししました。そうでなくて、この石打によって目が見えなくさせられた可能性もあります。肉体に傷があって、その弱さを身にまといながら、宣教の働きを進めて行ったと考えられます。

そう考えると、見方が変わりませんか？パウロはいかに力強く、まるで万能であるかのように錯覚してしまうのですが、見た目は正反対に、弱々しく見えたに違いありません。むしろ、その弱さの中にキリストの恵みが完全に現れ、弱さの中にキリストの力が覆います。苦しみの中にいる時に、それが神に見捨てられたのではなく、むしろキリストの恵みとその力が働いている、まさにその渦中にいて、弱さを誇る、つまり、弱さの中で神の使命を果たすことができるのです。

パウロは、自分を石打ちにしたリステラに、すぐに戻っていきます。翌日に行ったところは、デルベです。さらに東に 120 キロメートル行ったところですが、パウロが傷だらけの体を引きずりながら、歩いて行ったと考えられます。デルベは、今は、近くの小さな町からも 20 キロメートルも離れていたところにあり、小さな遺丘があるのみです。今、主要道路から離れていて、見ることはできませんでしたが、当時も、主要道路はほぼ今と同じところにあり、離れていたようです。ローマのガラテヤ属州にありました。

2B 励ましと教会の建て上げ 21－23

地図を見ると、分かりますが、ここからパウロの出身地タルソまでは、近いですが、それでも、200 キロメートルぐらいありますが。そのまま東に行けば、シリアのアンティオキアに行けます。しかし、彼らはそうしません。引き返します。それは、福音によってイエスを信じるように働きかけるだけが、彼らの目的ではないのです。イエスは使徒たちに、「あらゆる国々の人々を弟子とせよ。(マタイ 28:19)」と命じられました。弟子とすることが至上命題なのです。

²¹ 二人はこの町で福音を宣べ伝え、多くの人々を弟子としてから、リステラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返して、²² 弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」と語った。

使徒の働き 16 章 1 節を見ますと、パウロの信仰の息子になるテモテは、リステラの人だということです。また、デルベにも弟子がいました。「20:4 彼に同行していたのは、ピロの子であるベレア人ソパテロ、テサロニケ人のアリストアルコとセクンド、デルベ人のガイオ、テモテ、アジア人のティキコとトロフィモであった。」ガイオという弟子ですね。テモテと共に、パウロの宣教の旅に同行しています。そしてここでは、テモテはリステラ人ではなく、デルベ人と書かれています。出会ったのが、リステラだったけれども、デルベにも住んでいたのかもしれませんが。

パウロはテモテへの第二の手紙で、彼にこのように話しています。「3:11 また、アンティオキア、イコニオン、リステラで私に降りかかった迫害や苦難に、よくついて来てくれました。私はそのような迫害に耐えました。そして、主はそのすべてから私を救い出してくださいました。」テモテは、パウロの第二次宣教旅行の時に、彼に付いていったのですが、第一次の、14 章に書き記されているこれらの迫害と苦しみを、十分に知っていたのだと思われます。第一次の宣教旅行で、テモテは信じて、それから第二次の宣教旅行で、パウロと再び会って、それで彼について行きました。

そして、パウロとバルナバは、他のところでも行っていたように、「弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧め」ています。ただ信じれば、良いのではないのです。しっかりと、留まっているようにすることが必要です。主イエスご自身が、神のことばが、良い土地に落ちないといけないと語られました。それは、ただ聞くだけでなく、しっかりと心に保つことによって実を結びます。

そして、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」と語った」と言っています。先ほど、見たように、パウロは苦しみの中で、天にある栄光を見たであろうと思われます。苦しみがあつて、それから神の国に入るという栄光があります。「ロマ 8:17-18 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りない私は考えます。」

信仰者には、はっきりとした目標地点があります。神の国であり、そこにおられる王キリストであります。その方の御前に出て賞をいただきます。この方にひれ伏し、仕えます。これが私たちの目標です。しかしそこに入る前には、地上において苦しみがあります。それは、ここが悪魔の支配するこの世であるからです。

²³ また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食して祈った後、彼らをその信じている主に

ゆだねた。

パウロとバルナバは、弟子としていった後に、次に行ったのは「教会ごとに長老たちを選」んだことです。教会を建て上げ、治める者たちを選んでいきました。ここまでやって、宣教の目的が達成されます。福音を伝え、弟子とし、教会を建て上げます。

長老とは元々、そのまま「年老いた者」という意味です。旧約時代において、モーセが率いるイスラエル人たちの長老たちがいました(例:民数 11 章)。長老を立てて、その家、その教会を治めさせるのです。秩序と平和が与えられるべく指導者を立てていくのです。パウロとバルナバは、そうしたイスラエルの共同体の長、新約時代にもユダヤ人には「長老」が存在していましたが、そのまま、イエスを主として集まる教会にも踏襲し、信仰を持った者たちの中から選びました。ここでは、必ずしも年老いた者という意味ではなく、信仰的に成熟した者という意味合いになっています。教会が、キリストをかしらとして、からだとして成長し、神の家が建て上げられるには、しっかりとみことばと祈りによって、聖徒たちを整える、長老がいなければいけません。

今、日本においても、「信者たちがあつまれば、それが教会」という間違っただけの教えが、人々に信じられています。牧師とか、そういった指導者がいなければ教会だということではない。ただ、主の名によって集まればよいのだとするのです。しかし、召しと賜物を受けた指導者がいないところでは、羊飼いのいない羊が痛んでいるのを見て、群衆をイエスがかわいそうに思われたのかもしれませんが、そうした牧会的な主のお働きが、賜物が与えられている人によって受けることができなくなります。それで、霊的に痛んでしまいます。

そして、興味深いのは、「彼らをその信じている主にゆだねた」とあります。あまりにも多くの人たちが信じ、また彼らが去って行かなければならず、十分に整えたと言えなくとも、それでも、「主にゆだねた」のです。

2A 神の恵みの帰還 24-27

1B 福音宣教 24-26

²⁴ 二人はピシディアを通してパンフィリアに着き、²⁵ ペルゲでみことばを語ってからアタリアに下り、
²⁶ そこから船出してアンティオキアに帰った。そこは、二人が今回成し終えた働きのために、神の恵みにゆだねられて送り出された所であった。

彼らは行った道に戻ってきました。前回ペルゲに来た時は、御言葉を語った、という記述はありませんでしたが、帰る時は御言葉を伝えています。そこは港町ではなく、さらに川を下流に行き、アタリアという港町があります。今も観光でにぎやかな町です。そこから船出して、ついにシリアのアンティオキアに帰ってきました！おそらく、一年半ぐらいの旅だったんじゃないでしょうか。当時

は E メールも携帯電話もありませんから、連絡と言ってもほとんどしていなかったでしょう。今のよう
な伝達技術がなかったころ、カトリックの宣教師が日本に来た時は、数年かけて戻るような、気の
遠くなるような宣教旅行でした。

しかし、神の恵みは私たちを成功させます。「二人が今回成し終えた働きのために、神の恵みに
ゆだねられて送り出された所」とありますね。神の恵み、すなわち、自分たちではなく、主が一方的
に憐れんで、人々を救われていくという恵みにゆだねられて、送り出されたのです。そして、事実、
多くの苦しみがありましたが、一方的な神の恵みによって人々は救われていったのです。

2B 兄弟たちへの報告 27－28

²⁷ そこに着くと、彼らは教会の人々を集め、神が自分たちとともに行われたすべてのことと、異邦
人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。²⁸ そして二人は、しばらくの間、弟子たちととも
に過ごした。

宣教報告です。これはとても重要です。送り出す時に、彼らが手を置いたことを思い出してくださ
い。それは二人と自分たちはいっしょなのだということを示すものです。ですから、彼らに報告する
ことは自然なことであり、喜びを分かち合ったことでしょう。また、それは、しなければいけないこと
です。私もいつも、カルバリーチャペル・コスタメサには報告を入れて、祈ってもらっています。

報告は、第一に、神が共におられたことです。第二に、異邦人に信仰の門を開いてくださったこ
とです。アンティオキアに起こったことが、彼らの行くところでもどんどん、開かれたということを報
告しました。

そして彼らは、少し休みます。弟子たちと共に過ごしました。宣教の働きには、休憩が必要です。
そして主が次になされることを待つのです。